

スルメイカ類の分類の最近における動向

奥谷 喬 司 (国立科学博物館)

スルメイカの正しい学名が *Todarodes pacificus* Steenstrup であると認識されるまで (奥谷 1962), わが国の水産研究者は何の疑いもなく, *Ommastrephes sloani pacificus* という学名をあてていた。これは単なる査定の間違いとか, 綴り違いというのではなく 属定義や種の標徴認識と解釈に関して分類学上の基本的誤まりを含んでいる。

スルメイカ類 (アカイカ科) は西太平洋のみならず, 近年は東太平洋, 南太平洋, 西大西洋, 南大洋などあらゆる海域で新資源の開発利用が行われていながら, 正確な同定と正しい種名の用い方が行われておらず, 既にかかなりの混乱と誤解が生じている。

最近, わが国のみならず他の関係国の研究者もこの問題に真剣に取り組み始めていて, なにがしかの知見が集積されつつある。ここでは最近の公表された研究, 或いは海外研究者との交流を通じて得られた情報を速報的に紹介し, 今後の研究のヒントにしたいと考える。

1. イレックス亜科 ILLICINAE

カナダイレックス (まついか) *Illex illecebrosus* とヨーロッパイレックス *I. coindetii* は古くは亜種関係に扱う研究者が多かったのみならず, 標徴に対する正しい認識に乏しかったため, 分布域すら明瞭でなかった。しかし, 近年の詳細な比較形態学的研究 (Mangold 他 1969, Roper・Lu・Mangold 1969; Roper 1978) によって, 前者はアメリカ大陸沿岸に限られ, 後者は欧阿側に分布することが判った。しかもその個体群の一部がカリブ海を中心にして前者と同所 (sympatric) 分布をするところから亜種関係の考えは棄却された。その上更に第3の種, *I. oxygoniut* と同所分布することが明らかとされ南米沖で近年 (1963) 発見された異所的分布 (allopatric) 種と共に同属4種が大西洋に分布する。この亜科の別属ニセイレックス *Todaropsis eblanae* は, 久しく大西洋固有 (endemic) と思われていたのに最近 (Nesis 1979; Korzun 他 1979; Lu 1982) インド洋～南西太平洋にも分布することが知られるようになった。

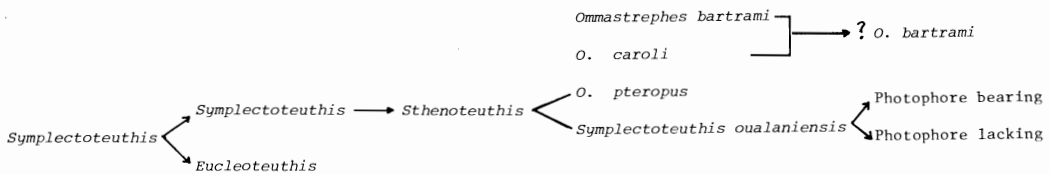
2. スルメイカ亜科 TODARODINAE

スルメイカ *Todarodes pacificus* は日本周辺特有种と思われていたが, ホンコンを中心

に南シナ海まで分布することが確実となった (Voss・Williamson 1972)。ところが最近小型で成熟するスルメイカが南西太平洋で発見された (Rancurel 1976), この種の分類学的取り扱いについてはなお一層の検討を要しよう。

大西洋においては久しくヨーロッパスルメイカ *Todarodes sagittatus* 1種しか知られていなかったが, アンゴラ以南に別(亜)種アンゴラスルメイカ *T. angolensis* が記載された (Adam 1962) あいついで亜南極圏からミナミスルメイカ *T. filippovae* が記載された (Adam 1975)。これによって大西洋の北から南にかけてひとつのクラインを示すかの如く見えたが, 環南極種のミナミスルメイカの分布域と相接するか, さもなくば同所的に南太平洋はアンゴラスルメイカも分布するのではないかという新しい情報がある (Dunning 私信)。この事からこの2種の分類学的相違は微妙なものとなる。

ニュージーランド近海でいわゆるニュージーランドスルメイカ *Nototodarus sloani* を主体とする開発が始った時以来, この中には交接腕の特徴から2型以上あるという疑問が提示されていた (斎藤 1972)。最近タスマニア近海のオーストラリアスルメイカ *N. gouldi* が開発されるに及んで, ニュージーランド近海にはこれら2種が同所的分布をし

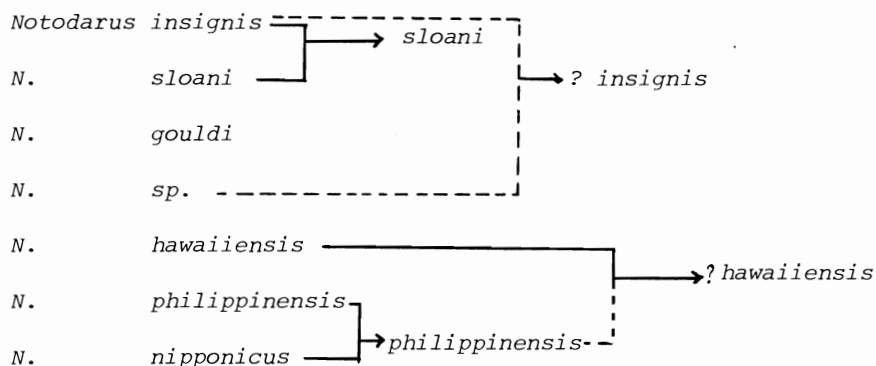


ていることが判り (Smith 他 1981), 更に第3の種も存在する可能性も示唆された (川上・奥谷 1981)。このためニュージーランドスルメイカとオーストラリアスルメイカが亜種の関係である考えは棄却されたが, 同時に前者の異名 (synonym) と考えられていた *N. insignis* とこれら2又は3種の異同について議論が再燃して来た。

Nototodarus 属が中央～南～西太平洋を囲んで地域的分化をとげ, 弧状にクラインを形成しているという考えが定着していた (奥谷 1975; Voss 1963) のは上記のほかにハワイからハワイスルメイカ *N. hawaiiensis*, フィリピンからフィリピンスルメイカ *N. philippinensis* 日本からアブライカ *N. nipponicus* が知られていたからである。しかし現在あとの2者は同一種であろうという考えが強まった (Roelevelt 私信; 奥谷 1983)。またそれはハワイスルメイカとも大きな差がなく, 或いは同一種内に含まれる可能性無しとはいえない。そうすると上述のような西太平洋を環るクラインではなく, (主) 北西太平洋の種コンプレックスと南西太平洋の種コンプレックスの対応となるか, 北西太平洋には1種のみ存在となるか今後の研究進展をみないと予断は許されないであろう。

3. アカイカ亜科 OMMASTREPHIDAE

Ommastrephes 属は本科中最も古いので、その後、属が細分されるまで多くの種に適用されて来たが、この属の様式種は現在アカイカに用いられている *O. bartrami* であるにも拘らず、のち *Sthenoteuthis* の属名が誤まって広く適用されて来た。最近、一部の研究者 (Zuev 他 1975 ; Roeleveld 1982) の間では *Sthenoteuthis* はニセアカイカ *O. pteropus* とトビイカ *Symplectoteuthis oualaniensis* (共に背側前方に発光組織がある) を同属にしてこれを復活用いている。また、一方、従来 *Symplectoteuthis* 属に属さしめていたスヂイカはトビイカとは軟骨器が癒着しているという特徴以外に共通の標徴に乏しく、むしろ Berry (1916) の創設した *Eucleoteuthis* を用いる研究者も多かったが、命名規約上の手続の不



備からこの属名は無効名 (nomen nudum) とする見解もある。一方 *Sthenoteuthis* によってニセアカイカとトビイカをくくろうとする見解に対して、トビイカ中に見られる背側発光器を欠く個体群 (Nesis 1977) を別種と見るか、種内個体群とみるかにより取り扱いが微妙となって来るであろう。更に最近の問題となっているのはヨーロッパアカイカ *O. caroli* の種的位置で、従来大西洋種とされていたこの種が南西太平洋 (Rancurel 1976)、北西太平洋 (奥谷他 1981) から報告されるに及んで、これはアカイカの地理的又は成長段階に関わる変異ではなかろうか (董 1981) との見解が出されて来た。

以上、何れの問題も各個の研究者が研究途中の段階で、なお流動的で結論が得られているとはいえないが、ここ暫くの研究展開によっては、上記の属群及びそれに属する種群の整理が思わぬ方向に発展する可能性もある。

質 疑

川上 (東海水研) : *Todarodes filippovae* (ミナミスルメイカ) の皮はやわらかく、はげやすい。*T. pacificus* (スルメイカ) の皮は *Nototodarus* (ニュージーランドスルメイカ

等) と非常に良く似てなめらかです。このように、皮がはげやすいとか、非常になめらかであるなどの特徴は分類に何か役立たないものでしょうか。

奥谷：実はアブライカを発見した端緒は、ザラザラした皮膚の特徴によるものでありまた、*T. sagittatus* (ヨーロッパスルメイカ) は日本のスルメイカと外見はよく似ていますが、外套膜の中まで紫色(色素)である特徴をもっています。このような色とか、皮がはげやすいかどうかを含めて皮膚のテクスチャーは重要な分類の形質だと思っています。

沖山(東大海洋研)：3つほどお尋ねします。①今の分類の混乱のお話しの中で、大変似たもの同士の話が沢山出てくるわけですが、亜種とシブリンクスピース(姉妹種)についてどのように考えておられるかを知りたい。②アカイカで第3腕に非常に大きな膜があると云うが、アカイカは従来から日本周辺にも多数みられたのに、なぜ今になって、そのようなことが問題になるのでしょうか。③スルメイカに関して Rancurel の業績の紹介がありましたが、スルメイカのように非常に大きなサブ・ポピュレーションをもって地理的にかなり独立しているように見え、しかも分布の中心がどちらかといえば亜熱帯域からやや温帯域の方に分布しているものに対しては如何お考えでしょうか。

Rancurel が指摘したのはもう少し熱帯の海域だと思うのですが、はたして同じ種類が分離するものかどうかお尋ねします。

奥谷：それぞれ分類学の核心をつくような問題でして、にわかに答えられるかどうかわかりませんが、①亜種の問題については *Illex illecebrosus* (カナダイレックス) と、*I. coindetii* (ヨーロッパイレックス) は昔は亜種の関係といわれていました。ところが、分布がオーバーラップしているという理由と、*I. illecebrosus* の場合、ICNAF の報告でいちいち種名を書くときの実用的な問題もあり、只今は別種に扱っている人が多いのですが、マクロな面で見ますと、おそらく *I. coindetii* と *I. illecebrosus* は亜種的な関係とみてよいと思います。それから、*Nototodarus* の中でも *N. sloani* (ニュージーランドスルメイカ) を基本種として、*N. hawaiiensis* (ハワイスルメイカ)、*N. philippinensis* (フィリピンスルメイカ) と記載されたときは、すべてその亜種とされてきました。もし、これらが形態的特徴からだけでなく、分布域の関係からも分けられるとするならば、これは亜種であるとの見解は支持できると思います。シブリンクスピースの問題は、外洋性のイカについては、それを明確にするだけの分類的標徴自身確立されておられません。研究者によってこれが重要という方と、そうでないという方があり、現段階でシブリンクスピースの議論までは進むには知識が充分でないと思います。

②アカイカの第3腕の膜の問題は、私共を含めて日本の分類学者の非常に大きな見落としです。特に、先程の笠原氏の指摘のように比較的若いアカイカは膜が狭くて、ヨー

ロッパアカイカといわれている非常に老成した標本では、特に広がっている特徴がありますので、日本で漁獲の対象になっていた様なものでは見落されていたとみるのが正しいでしょう。おそらく今までの研究者が腕の膜などに対して分類の標徴になり得る事に気付かなかったという見識不足であったと思われます。

③ スルメイカは産卵場がむしろ亜熱帯域にあるので、温帯性ともいいにくいのですが、Rancurelが報告したニューギニアの沖のポピュレーションについては実体が良く判りません。今オーストラリアのダニングなどの若い研究者がああ海域のイカ類を熱心に研究しているので、だんだん明らかにされてくると思います。もし、形態的にスルメイカと寸分違わないとしても分布域の特性、性成熟のサイズの相違などが明確に異なるならば非常に隔離した亜種とみるべきかもしれません。